25PB-pm275S

多変量解析を用いた早期臨床体験における学修成果の検討　―薬学部入学生の志向に関するプレアンケートの解析―

○生田 陽光[1], 串畑 太郎[1], 西川 智絵[1], 栗尾 和佐子[1], 安原 智久[1], 曽根 知道[1]（[1]摂南大薬）

【目的】早期臨床体験は、低学年次から薬剤師への理解を深めることで、薬学部における学修意義を認識すると共に、今後の学習に対するモチベーションを高める上でも非常に重要である。しかし、薬学部入学生の薬剤師に対する認識や関心と早期臨床体験における学修成果に関する研究は少ない。本研究では、薬学部入学生の薬剤師や医療に対する志向をアンケート結果の多変量解析から検討する。

【方法】2016 年度 1 年次生 217 名を対象として、入学直後に薬剤師や医療に対する志向に関するプレアンケート（五件法・全 20 項目）を実施した。アンケート結果を用いて探索的因子分析（主成分法・Quartimin 回転）を行い、抽出された因子は、各因子を構成する項目（因子負荷量：0.5 以上）より命名した。更に、算出された因子得点を用いて階層型クラスター分析（Ward 法）を行った。

【結果・考察】因子分析の結果、因子 1：病院薬剤師への関心（7 項目，20.6%）、因子 2：薬局薬剤師への関心（6 項目，17.1%）、因子 3：薬剤師の具体的な業務の認識（5 項目，17.1%）、因子 4：薬局での地域・在宅医療への関心（2 項目，12.4%）、の 4 因子（構成項目数，寄与率）が抽出された。クラスター分析の結果、全ての因子が平均以上で、特に薬局薬剤師への関心が高い A 群（22.0%）、病院薬剤師への関心が高く、薬局薬剤師への関心が低いが、薬局での地域・在宅医療への関心は高い B 群（21.5%）、病院薬剤師への関心が低く、他の因子は平均的な C 群（37.9%）、薬局薬剤師への関心が低く、薬局での地域・在宅医療への関心も低い D 群（11.7%）、全ての因子が平均より低く、特に薬剤師の具体的な業務の認識が著しく低い E 群（7.0%）の 5 群（構成比）に分類された。これらの学生に、早期臨床体験の各施設での実施内容が与えた印象と共に、学修成果についても検証していく。